

絶望の日々 心は男なのに

私があなたを
思うとき
私あな
想うとき

自分の性を生きる



ウエディングフォトに納まる
理恵さん(33)と千尋さん

写真の男女は晴れやかな笑みを浮かべている。「われながら幸せそうな顔してますね」。廿日市市の写真家、川本理恵さん(33)は目を細めた。隣に映るのは妻

の千尋さん(31)。2人の背中越しにパリのシンボル、エッフェル塔が見える。この春、フランスでウエディングフォトを撮った。こんな日を迎えられるなんて、昔の自分には想像もできなかった。むしろ、結婚など無縁なのだと思っていた。生まれた時、親が付けてくれた名前は「絵理」。理恵さんは、女の子として育てられてきた。

七つ上に兄、五つ上に姉がいる。末娘として家族みんなにかわいがられた。ただ幼い頃から自分の体に違和感があった。兄ではなく、姉のお下がりを着せられるのが嫌だった。学校では「女子」に区分された。やがて胸が膨らみ、生理も始まる。絶望した。心は男なのに。あれは高校生の時のこと。母から唐突に聞かれて、心臓が凍り付いた。「ねえ、本当は男の子になりたいんじゃないの?」

(編集委員・田中美千子)

3面に続く

企画「私があなたを想うとき」では、家族が直面する問題を夫と妻、親と子といった当事者それぞれの視点で「side-A」「side-B」として描き、安心した暮らしへの糸口を考えていく。



がたとを
私あなう
想

自分の性を生きる

1面から続く

体は女、心は男。物心ついた頃から違和感があったと、廿日市市の写真家、川本理恵さん(33)は言う。ずっと苦しかった。自分はきつとおかしい。一体、何者なのか。間違った体に生まれてしまった感覚など、分かってもらえない。怖くて、誰にも打ち明けられなかった。



川本理恵さん

だから母に「男になりたいのか」と問われた時、とっさに答えていた。「は？違うよ」。うまく笑えたかどうか分らない。でも、家族は心安らぐ唯一の居場所だった。その安定を絶対に失いたくなかった。

学校には苦痛ばかり強いられきた。赤いランドセル、女子トイレ、プールの授業……。自分のことを何と呼べばいいのか、一人称も分からなかった。「私」とは言いたくない。「僕」じゃ変だ

と言われる。「絵理」という当時の名前にも抵抗があった。次第に自分の話をするのを避けて、聞き役に回るようになった。

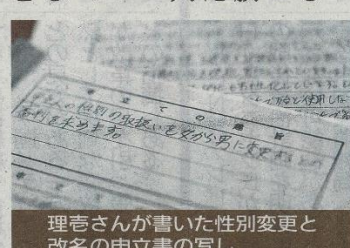
「女子が好きな女子とか、いるらしいよ。キモくない？」。ある時、友達言葉にドキリとした。本当の事は誰にも言えないと胸に刻んだ。初潮が来た日は、隠れて号泣した。

「自分なんて」。嫌悪感と劣等感がつきまとう。だから友達に嫌われまいと必死だった。笑顔を絶やさず、陽気に振る舞う日々。夜にはいつもくたくただった。高校時代はリストカットを繰り返した。母はそんな異変に気付いていたのかもしれない。

やっと告白できたのは地元の大学を出た後だった。

「元女子な写真家」人生ありのままで

た。在学中にいろいろ調べた。岡山に専門のクリニックがあること、性別適合手術を受ければ戸籍が変えられること……。内緒で通院を始め、心を固めた。23歳の秋、母の枕元に手紙を置いた。「ごめんなさい。社会に出る前に男になります」。きつと悲しませたと思うと、顔を合わせるのが怖かった。1週間家を空け、帰宅すると母は言った。「早く気付いてあげられずにごめんね」と。泣いている母を初めて見た。母は自分を責めていた。何度も謝ってくる。こんなにも愛されているんだ。安堵が押し寄せ、一緒に泣いた。母は家族にも全てを伝えてくれたらしかった。そこから人生は一気に動き始めた。

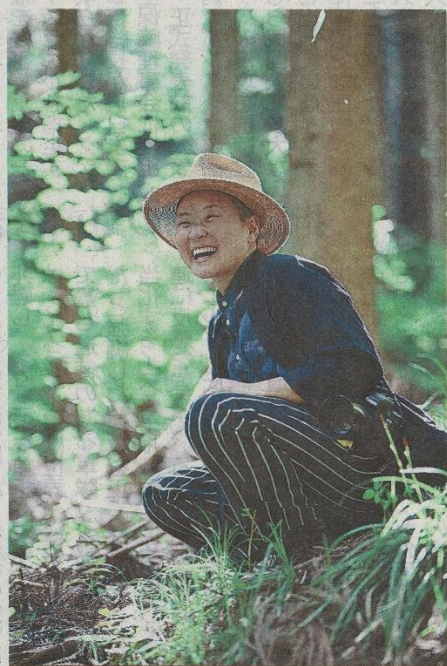


理恵さんが書いた性別変更と改名の申立書の写し

葛藤する母の目線から息子への想いを描いた「side-B」はこちら↓紙面では12日のくらし面に掲載します。

母から息子へ

3年前、父ががんで急逝。実家で母と妻と、穏やかな日々を送っていた。やっと思えるようになった。「苦しいんだ、心を磨けた。人の痛みが少しは分かる人間になれたかな」。今、ウェブサイトで「元女子な写真家」。ありのままの自分を生きている。(編集委員・田中美千子)



森を歩く理恵さん。「自然が好き。自分も自然体でいようと思える」(撮影・高橋洋史)